

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, kum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダー・プロジェクト

第12号

2009年5月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町 65

日本聖公会

正義と平和委員会

・ジェンダー・プロジェクト

TEL03-5228-3171

発行責任者: 大岡左代子

耳を傾ける旅 ～神様に創造された私たち～

司祭 小林 聡 (京都教区)

1997年、私は英国、バーミンガムにあったメソジスト教会と聖公会の合同神学校であるアセンション・カレッジに留学しました。多宗教都市バーミンガムにあったそのカレッジは全聖公会の中で宗教間対話が推奨される学校であり、毎日さまざまな国から来ていた聖公会や他教派の方々の司式のもと、礼拝生活を行っていました。翌年、私はたまたまその神学校にいたこともあり、ランベス会議のステュワードとして他の学生と共に会議のお手伝いに参加させていただきました。大きな話題の一つが、同性愛をめぐる対立でした。98年ランベス会議決議の中に、「耳を傾ける」ことの大切さが盛り込まれましたが、私はある南アフリカから来たステュワードの一人の方が、「同性愛者を擁護する者は悪魔の手先である」と言ったことに大きなショックを受け、恐怖を感じたのでした。その年の初め、私は在籍していた学校の小論文で、教会における奉仕職のパートナーシップのあり方として、神に創造され違いを持った一人と一人が互いに尊敬し好意を示す時に、相応しい助け手となっていくと書いていました。その違いには、当然セクシュアル・マイノリティーが含まれています。

ランベス会議後、私はアングリカン・コミュニオン・フィールドワークとして、他管区を訪れました。奉仕職におけるパートナーシップを学ぶことも、私のフィールド・ワークの課題の一つでした。南アフリカ管区は、デズモンド・ツツ主教が「性的指向の違いは皮膚の色の違いと同じ、ただそれだけのこと」と述べ、人々に影響を与えてきた場所でした。その南アフリカで差別撤廃を主な目的として、1996年に作られた新しい憲法には、性的指向への差別を禁止する条項が盛り込まれていました。つまり、同性愛が法的に保障されているのです。南アフリカに降り立った私を感じたことは、安心感でした。

同性愛者であれ異性愛者であれ、もしどちらかでも法的に禁止されれば、安心感はなくなくなりました。続くオーストラリアを訪れた時、オーストラリアには同性愛を禁じる法律があったが、大衆の運動によってその法令は改正されたと知りました。実は、世界には同性愛を禁止する法律を持つ国が存在します。訪れたオーストラリア合同教会の本部事務所にて、「社会責任と正義」委員会の方々からセクシュアル・マイノリティーについてのお話を伺い、何人かの方が「同性愛者にとって安全な場所はこの地球上の何処にもありません」と言われたことが今も心に残っています。この委員会には合同教会の牧師達と聖公会員がメンバーとしておられました。

1999年当時、オーストラリアでの全自殺者の内30パーセントが同性愛者で、アメリカではその割合が40パーセントにも及ぶと言われていました。私達がこの世界で自分自身について語ることがどんなに難しいかを考えさせられる時となりました。

私はその日の夕方、マディグラ映画祭 (Mardi Gras) に行きました。私のいた日の次の週マディグラ・ゲイ・アンド・レズビアン・カーニバルがありましたが、この映画祭はそのイベントの一環です。大斎節前の時期に毎年行われるシドニーでのこのカーニバルの実行委員長をしていたのが、私が合同教会本部事務所で出会った牧師のお一人でした。

私がそもそもこうやって旅をしたのは、人々に出会うためでした。この今日という日を生き抜くために闘っているセクシュアル・マイノリティーの人々に出会うためでした。ランベス会議決議が示す「耳を傾ける」ことは、当事者の声を聴くことですが、同時にそれは、すべての人が「私は私である」と声に出して表明するそのことに耳を傾けることだと思うのです。しかし私が旅をして感じたのは、この世界がいかに「私が私である」ということを言えない世界なのかということでした。

日本に帰ってきた私は、日本基督教団京都教区性差別問題小委員会が主催する合宿に出かけました。セクシュアル・マイノリティーを巡る課題が分かち合われていたからです。そこで売っていた『聖書を読み直す』（樋口進 著）という冊子に、聖書は性的暴力を否定しているが、セクシュアル・マイノリティーの存在は否定していないことが記されていました。私も聖書の該当箇所を読んでいます。セクシュアル・マイノリティーを否定するようには解釈できません。むしろ、一人ひとりの違いを大切にしつつ、神が私たちを創造されたのであれば、「私は私である」と互いに言い合い、尊敬し合い、好意を伝え合うことが神の御心でありましょう。しかし御心と相反する現実の中で、毎日が戦場として過ごしている人々がいることを覚えたのです。この場を安心の場に変えられるか、それとも戦場のままにするのかは、実に私たちにかかっているのです。私が今思うことは、出会ってきた人々と共に生きたいということと、違いがあるからこそ創造主である神を賛美出来るということです。私たちの旅はその途上にあります。

アメリカの教会などでは、「包含的言語」(inclusive language)を使って、教会に横たわる父権制・男性中心主義の意識を変えて行く試みがずいぶんと昔から行われています。なかにはLord(主)という単語は明らかに男性名詞なので、Godと言い換えてみたら、Oh My Lordという聖歌の歌詞が、Oh My God!(しまった!)になってしまった。なんていう、笑うに笑えない話も聞きますが、文法における性(せい)を持っていないわたしたち日本の教会にとっては、そんな努力もどこか他人事のような感じがします。

わたしたちは祈るときに、「父と子と聖霊」の名によって祈ります。では、神さまは「父」であり、「男性」なののでしょうか？

そしてまた、ヘブライ語聖書（旧約聖書）では、神さまを「父」と呼ぶ例は多くはありません。それは、神さまが「父」という矮小化されたイメージに押し込められてしまうことが、偶像礼拝になるためです。ヘブライ語聖書では、限定されたイメージではなく、さまざまな呼び方や比喩を用いて、神さまが人間には思い描くことの出来ない超越した方であることを示そうとしています。このように言うと、その呼び方の多くが男性名詞で記述されているのではないかと指摘を受けます。ですが、単語の標準形は男性形というヘブライ語の言語的な特性（ここでは限界）を、神さまに投影することは、神さまを限定、矮小化しないというヘブライ語聖書の他の箇所での努力から出来ないと言えるのではないのでしょうか。

たとえば、イザヤ書 42 章 14 節に「今、わたしは子を産む女のようにあえぎ 激しく息を吸い、また息を吐く。」という箇所があります。「憐れみ」という意味のヘブライ語の単語は、「子宮」という言葉から派生していて、神さまの憐れみ深さは、女性のイメージの中で語られますが、このイザヤ書の箇所でも、神さまを「父」ではなく「母」のイメージで表現しています。このような子どもを慈しむ母親の比喻を神さまに使うことは、マタイ福音書 23 章 37 節（ルカによる福音書 13 章 34 節）にある「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか」というイエスさまの自身の自己理解にも引き継がれています。

では、神さまに対して「母」と呼びかけて祈ることをお前は奨励するのかと聞かれれば、答えは否です。それは、「母」という呼びかけも、教会に横たわる父権制・男性中心主義を擁護する限定した呼びかけとしての「父」に対峙することでは、意味があるかもしれませんが、「父」と同じように、継続して常時使われれば、やはり限定したイメージに神さまを押し込めてしまうことになるからです。

3

■ ワークショップ「アジアのフェミニスト・リーダーシップ」に参加して



左から2番目が筆者

上澤伸子 (リグリマ・ジャパン代表/
東京教区聖パトリック教会 信徒)

私はバングラデシュの少数民族ガロの女性たちと共に、「リグリマ」という相互扶助グループを運営しています。現在、バングラデシュには11グループ約100名のメンバーが活動しています。また日本にもその活動を支える「リグリマ・ジャパン」が2007年に立ち上げられ、9名ほどのコアメンバーが、親の介護、子育て、仕事などで時間のない中、ほそぼそと活動をつづ

けてきました。この活動を通じて、私は現在ひとつの課題を抱えています。それは、メンバーに過度の負担を強いない活動や上下関係のない組織づくりはいかにして可能かというものでした。

この課題をもって、私は2009年2月23～28日にマレーシアで開催されたワークショップ「アジアのフェミニスト・リーダーシップ」に参加しました。主催したAWRC (Asian Women's Resource Center for Culture and Theology) は、「In God's Image」というフェミニスト神学の雑誌を年4回刊行し、アジア各国のクリスチャン女性たちに交流の場を提供しているエキュメニカルな団体です。今回のワークショップには、インド、インドネシア、韓国、スリランカ、タイ、日本、ネパール、バングラデシュ、フィリピン、米国、香港、マレーシア、ミャンマーから、さまざまな教派に属する30名の女性たちが集まりました。

話し合いの焦点は、「既存のリーダーシップの力と権威をフェミニスト視点から分析し、アジアのフェミニスト・リーダーシップを思い描くこと」に当てられました。全6日間、午前中はそれぞれの関心にしたがって4グループ(教会とエキュメニカル組織、家族と人間関係、NGOと社会運動、政府の政策・意志決定)に分かれて討議し、午後は全体で討議していきました。

まず話し合われたのは、権威とは何か、力とは何か、リーダーシップとは何かといった定義に関する問題です。次にそれらはどのような性質をもち、どこに存在するのか、さらに自分たちの文脈にしたがって力や権威をとらえ、再定義するとどうなるかを話し合いました。最後にフェミニスト・リーダーとして自分たちはどのような力を実践していくかという展望について討議しました。

そこで交わされたさまざまな声に耳を傾けてみましょう。神は力であり、力は神の贈り物である。力は責任とともに生ずる。力も権威も上下関係や男性の権力を想起させる言葉であり、教会のヒエラルキーの中に存在する。女性リーダーが力をもつと男性中心ヒエラルキーを補強することがある。教会では妊娠中の女性牧師が否定的なイメージでとらえられることがある。家庭では母親がリーダーシップをとっているが、子どもを抑圧する存在にもなりうる。社会では異性愛が当然のものとされているが、現実には多様な性指向の人たちがいる中で、夫婦・家族の定義も関係も変化している。

ワークショップの4日目には、フェミニスト神学者である絹川久子さんによって「オルタナティブなリーダーシップ」と題した聖書研究が行なわれました。出エジプト記と民数記を題材に、権力構造の頂点に立つモーセと、民衆の間に立つミリアムのリーダーシップ

とを比較し、自分たちはどちらの立場をとるか、などが話し合われました。さらに福音書において否定的なイメージで書かれたマグダラのマリアのリーダーシップについて、聖書が書かれた背景を吟味しながら読み直しました。これらフェミニスト視点の聖書解釈によって、これまでの固定的な聖書の読みがガラガラと音を立ててくずれ、女性たちを率いて踊るミリアムの姿や、キリスト教初期共同体でリーダーシップを発揮するマリアの姿がくっきりと浮かび上がってきました。

以上の討議から、自分たちの周りには多様な力が存在すること、また力の実践もさまざまであることが確認されました。問題なのは一方向的な力であり、より柔軟で、動きのある力が必要だということです。さらに女性たちはさまざまな方向から力が行使されていると同時に、自分の中にも力をもっています。しかしその力を実践する機会が与えられていません。フェミニスト・リーダーシップを示すために、力を使うことができるということも共有しました。

私はこのワークショップに参加して、「上下関係のない組織づくり」という自分の課題に対していくつかのヒントをもらいました。組織の拡大によって上下関係が生まれそうになったら、組織を分化し、小組織同士の関係を親子関係ではなく姉妹関係でつなげばよいこと。垂直に立つピラミッド型組織を水平に寝かせてしまえば、ヒエラルキーを取り除くことができること。一人の人間だけが固定化した役割をもつのではなく、メンバー各人のもつタレントにしたがって、それぞれがコメディアンシップ、カウンセラーシップ、リーダーシップ、ライターシップ、ファシリテーターシップなどを発揮し、柔軟に交換すること。これらのヒントはどれもじつにシンプルであるのに、なぜこれまで気づかなかったのでしょうか。力を分かち合うことを学んでこなかった私にとって、それは大きな発見であり、新たなチャレンジとなりました。

第 53 回 国連女性の地位委員会報告 Part1

今年も3月2日～13日まで、ニューヨークの国連本部に於いて女性の地位委員会（UNCSWと略します）が開かれ、国連NGO団体にも登録されているACC（聖公会中央協議会）から各管区首座主教へ派遣要請があり、日本聖公会から吉松さち子さんと佐々木紀久江さん（共に東京教区）が派遣されました。お二人ともタイのチェンマイでエイズ患者の方々のサポートを行っている団体「バーンサバイ」の支援グループ「バーンサバイ共の会」の会員でもあります。

今回の会議報告を2回シリーズでお届けします。1回目の今回は、会議の概要、佐々木さんの参加の感想（管区事務所より236号より転載）とインタビューを掲載します。次号では、話し合われた会議の成果（ステートメント）などを掲載予定です。（女性デスク 木川田道子）

会議の概要

■会議名：国連女性の地位委員会（UNCSW）

■日程：2009年2月27日～3月1日
（予備セッション3月2日～13日）

■主要テーマ：

HIV/AIDSのケア提供を含む男女間の責任分担

■参加者：

各国政府代表 5,281人、NGO代表 5,000人（うちACCは、各国から108名の女性が参加）NGOは過去最多数の参加。ACC参加者は、事前レポートの作成、本会議の傍聴、地域別グループでのテーマ別討議、自国政府へのロビイング、帰国後の、政府・自治体・教会などへの働きかけについてのレポート作成などを行う。

■2010年のUNCSWのテーマ：

女性と健康



佐々木紀久江(東京教区 葛飾茨十字教会)

皆様のお支えとお祈りにより、ニューヨークで開催されました第53回 UNCSWに吉松さち子さんと共に参加させていただきました。通訳なしの国際会議は初めてで、当初お断りしましたが、「大丈夫、参加することに意味があるのだから」との声に押され参加したものの、朝8時より各教派、グループによるいろいろな形のエキュメニカル礼拝に始まり、国連本会議傍聴ならびに同時進行で行われる各NGOのイベントやセミナー、ACC独自のプログラムと一日4～5の催しに参加、毎日のレポート提出と英語力の乏しさを大いに思い知らされた2週間余でした。



参加者と一緒に（後列左が筆者）

ACCの会合では女性達の教会での取り組み特にアフリカの女性の明るさ、パワーに圧倒されました。また、世界各地の教会が積極的に貧困や男女の役割、性教育にも取り組んでいることに驚かせられました。特に印象に残ったのはコロンビアのご夫妻のレポートでした。教会が青少年のグループに、単にHIV/AIDSの知識・予防の教育だけでなく、その感染者に対する差別、偏見を持つことなく接する大切さを強調し、性の面でも男女お互いに尊重する教育を行っているということでした。その実態について映像を用いて妻がポルトガル語で発表、夫が通訳と映像でサポートと、仲良くまさに男女平等の役割分担の姿を目の当たり示してくれたことも心に残りました。日本でも厚生労働省の発表にもあるように、年々性交渉の低年齢化と共にHIV/AIDSの感染者が増加しつつあり、若い世代への教育の必要性を感じます。

世界中で先進国と開発途上国に状況の差はあるにせよ、教会が積極的にさまざまな課題に取り組み、若い世代に信仰をバトンタッチしていく努力をしていることを目の当たりに体験できたことを感謝すると共に、今回の経験を今後に生かしていきたいと思います。

＊もう一人の参加者、吉松さんの報告も『管区事務所だより236号』に掲載されていますので、そちらもどうぞ併せてご覧ください。



佐々木紀久江さんにインタビュー！

ミチコ(女性デスク)：ACCの108人の女性たちはそれぞれどんな立場で教会の中での働きをされている方でしたか？

紀久江：目だったのはやはり女性の司祭、それに、司祭のお連れ合いも多かったと思います。また教会主事もおられました。アメリカやカナダは近いので部分参加されていた方も多かったようです。他にはマザーズユニオンや婦人会の会長など団体代表の方や青少年層のり

ーダーなど。香港からは20歳の方も来ておられましたよ。それと、アフリカから来られていた方は、教会のリーダー＝コミュニティのリーダーとしてAIDS患者のサポートなどに関わっている方が多かったようです。

ミチコ：日本からはどんなNGOが参加されていましたか？

紀久江：日本女性監視機構（JWW）や日弁連の方、またJICAや国境なき医師団などのNGO、介護団体から参加されていた方も。

ミチコ：他の管区代表の方のお話を聞いて、日本と海外の教会が、こういうことなら協働で取り組めるのではないかと、と思われることはありましたか？

紀久江：私達はACCの中でアジア・太平洋グループに属していますが、特に韓国・フィリピン・インドネシア・タイ・インド・バングラデシュなどの国々では移住労働者のことが共通の問題として話し合われました。送り出し国受入国の違いはありますが、協働で取り組めるのではないかと思います。日本政府とのブリーフィングでも今話題の看護師・介護などの受け入れの問題点がNGO側から指摘されていました。教会がそのような方々の抱える問題を共に考えていけたらと思います。

ミチコ：さて聖書朗読の担当の時に、ルツ記を「熱演」されたと聞きましたが・・・。

紀久江：閉会礼拝は、各部分を自国語ですることとなり、日本は、旧約聖書（ルツ記）朗読の担当となりました。吉松さんの提案で、たまたま彼女が持っていた御土産用の番傘と日本手ぬぐいを使って、ルツとナオミになりきって演じましたよ～。日本語でしたが、よくわかってくれたみたいでなかなか好評でした。

ミチコ：毎日会議続きだったと思いますが、気分転換になることはありましたか？

紀久江：日曜日に9.11の現場を訪れ、近くのトリニティ教会の礼拝に出席したこと。期間中に地域別グループのメンバーと2時間ほど美術館に行ったことくらいではほぼ缶詰生活でしたが、夕食をとるためにホテルの近くのレストランに出かけ、ニューヨークの雰囲気を感じることが出来ました。

ミチコ：ハードな会議だったと思います。2週間、本当にお疲れさまでした！

お話を聴いてみませんか!?

グループなどでお二人の貴重な報告を聞く会や学習会を企画してみたいかがで
しょうか。希望者は女性デスク（木川田まで）

カンパ募集中！

参加費不足分（約15万円）のカンパを呼びかけています。

ご協力いただける方、通信欄に「ニューヨーク会議カンパ」とお書きいただき、以下の口座までお送りください。尚、必要金額を超過した場合は、来年のためにプールさせていただきます。どうぞよろしくお願いします。（管区女性デスク）

口座名 日本聖公会女性デスク資金

口座番号 00990-6-122645

■コラム わたしの瞳に映る景色 ① ■■■ 司祭 後藤香織 ■■■

～あの人は、ああいう人よ～

皆さん、こんにちは。男性から女性への性別越境者(*1)の後藤香織です。男女二分法の社会の中、わたしたち性別を移行して生活をする者は、社会的・文化的な性のありようの壁の狭間で、おそらく男女二分法の中で生活しておられる多くの方とは、ちょっと違った経験をしながら生活しています。このコラムではそのような方々の瞳には映りにくいけれど、わたしたち性別越境者の瞳には映る景色を紹介しながら、わたしたちが一般的に持っているジェンダー・バイアス(*2)について、ご一緒に考えてゆきたいと思います。どうぞしばらくの間おつきあいください。

さて、人は誰しも程度の差はあれ、相手の年齢や社会的地位、そして性別によって、人への接し方を変えて、対人関係を築いています。それは多くの場合、意識してではなく、無意識に行われます。性別によって接し方が異なりますが、女性は、ある人の女性に対する接し方しか経験出来ませんし、男性は、ある人の男性に対する接し方しか経験出来ません。わたしは同じ方に、男だった時と、女になってからと、お会いすることが偶にあります。つまり同じ方の、女性に対する接し方と、男性に対する接し方の両方を経験することがあるのです。最初にその経験をしたときには、あまりにも対応が違うので、本当に愕然としました。その事を、その方と一緒に会った女性の方に話すと、「あの人は、ああいう人よ。」という答えが返ってきました。確かに、女性に対しては「ああいう人」なのかもしれませんが、男のときには丁寧に接してもらったわたしにとっては、「ああいう人」と思うことが出来ず、改めて「男性の特権」がいかに大きなものであるかを感じました。

たまたまこの方の女性と男性への接し方が大きく違っていたということはあるかもしれませんが、女性と男性に対して全く同じ接し方をする人の方が、実は珍しいということを、わたしは毎日経験しています。そして大きな問題は、それが意識的にではなく、無意識に行われているということです。

まずは、わたしたち自身の女性と男性への接し方の違いを、意識してみませんか？そこから、わたしたちが持っている社会的・文化的な性のありよう、あるいは性別による偏見が見え始めると思います。

* 1 性別越境者：生物学的な性別に付与される性別役割を越えて生活をする者。いわゆるトランスジェンダーのこと。「越境者」という表現は、当事者から快く思われないのですが、性別二元論幻想に対峙するためにここではあえて使います。ちなみに性別を女から男へ移行する人を FtM (female to male)、反対を Mtf (male to female) と呼びます。

* 2 ジェンダー・バイアスとは、社会的・文化的な性のありようによる偏見、あるいは性別による偏見のこと。日本語としてこなれていないという批判はあるかと思いますが、他に良い言葉もないのでとりあえず使っています。他に良い言い回しがありましたら、お教えください。

ジェンダープロジェクトからのお知らせ

■新メンバーを迎え、いよいよ動きだしたジェンダー・プロジェクトです。新メンバー3名を含めて、今総会期は次のメンバーで活動いたします。

大岡左代子（プロジェクト窓口担当/京都教区）、金善姫（中部教区）、小林聡司祭（京都教区）、西原美香子（中部教区）、松原恵美子（大阪教区）、松村真理子（中部教区）
陪席：木川田道子（管区女性デスク）

新メンバー紹介

ドルカス 松村真理子(名古屋聖ステパノ教会)

今期からジェンダー・プロジェクトに参加させていただきます。扉を開けるとまた扉、それを開けるとまた…。ジェンダーの課題に関わっていく中で感じています。そのくらい私の中にはコチコチの性別役割分担が染み付いていたのでしょうか。扉を開けるたびに広がる世界に戸惑い驚きつつ、その先に一步踏み出したいと思っています。

フィデス ^{キムソンヒ}金善姫(中部教区聖職候補生)

2008年に聖公会神学院を卒業し、4月から北アルプスの松本で生活して一年。これからジェンダー・プロジェクトに加わることになりました。女性・貧困・暴力に関心を持っていながら、勉強不足でいつも頭を抱えています。趣味はおしゃべりと食べること。神学院を卒業して楽器を練習し運動をしようと思ったのに、やはり思いに留まったままです。

バルナバ 司祭 小林聡（京都教区）

大津聖マリア教会・彦根聖愛教会牧師、平安女学院中高チャプレンをしています。出会いと学びの機会が与えられたことを感謝しています。セクシュアル・マジョリティーに属する私がどのように生きていけばいいのか模索していきたいと思います。

■今期の大切な課題としている性的少数者への理解を深めるための第一歩として、今号より、後藤香織司祭によるコラム「わたしの瞳に映る景色」の連載が始まりました。また、夏以降に公開学習会を行う準備も始めています。学習会は管区プロジェクト主催の企画ではありますが、より多くの方の参加、理解を得るために人権担当者、女性デスクとの共催はもちろんのこと、開催地やその近隣教区との共催も視野にいれて準備をすすめたいと考えております。詳細が決まり次第お知らせいたしますが、各教区の担当部門などに共催依頼のお声をかけさせていただくこともあるかと思えます。その時にはご協力いただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

女性とは？

ジェンダー・プロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるという考え方をしています。性の多様化の中、「女性」という表現自体が問題視されることもあります。タリタ・クムで用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としての理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

「タリタ・クム」とは？

すべての人が尊重される教会と社会の実現のために、ジェンダー課題の共有と克服にとりくんでいます。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年3～4回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの人が、ジェンダーの課題に関心を持ってくださり、共に考えていける場をつくっていきたくと願っています。

「タリタ・クム」とは？

「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です。(マルコ 5:41) 今までジェンダーのために充分に発揮することができなかった女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。

ジェンダー・プロジェクトの活動に関するお問い合わせ、
また紙面についてのご意見は、下記にお願いいたします。

大岡左代子 TEL073-422-0055 FAX073-436-3333

タリタクムは管区事務所のホームページでもご覧頂けます。

<http://nsskiinkai.blog116.fc2.com/blog-category-3.html>